

$\mu\text{U/ml}$ であった。本キットと RIA-gnost TSH Ultra-sensitive, 本キットと SUCROSEP TSH IRMA との間には良好な相関が認められた。

臨床的検討：健常者血中平均 TSH 濃度は、 1.55 ± 1.06 (Mean $\pm$ S.D.) $\mu\text{U/ml}$ であり、対数確率紙にて求めた正常範囲は $0.3 \sim 4.0 \mu\text{U/ml}$ であった。未治療 Graves 病患者の血中 TSH 濃度は、 $0.05 \mu\text{U/ml}$ 以下に分布し、健常者との鑑別が可能であった。寛解期および抗甲状腺剤治療中の Graves 病患者の血中 TSH 濃度は、全例未治療のそれと比較して高値であった。

結語：本キットは臨床的応用に有用であると結論された。

9. 高感度 TSH 測定法：Ab チューブ TSH 'Eiken' による血中 TSH 濃度測定法の基礎的ならびに臨床的検討

原 秀雄 長倉 穂積 佐藤 龍次
九島 健二 伴 良雄 (昭和大・三内)

前回、最低検出濃度が $0.1 \mu\text{U/ml}$ である SUCROSEP TSH IRMA と $0.08 \mu\text{U/ml}$ である RIA-gnost TSH Ultrasensitive について報告したが、このたび新たに 2 種類のポリクローナル抗体を用いたチューブ固相法による Ab Tube TSH 'Eiken' を入手し、基礎的ならびに臨床的検討を行ったので報告する。

対象：健常者 (N) 83 例、バセドウ病患者 (G) 66 例、慢性甲状腺炎患者 7 例、計 154 例。

結果：室温 4 時間のインキュベーションにて TSH $0.1 \sim 205 \mu\text{U/ml}$ の測定が可能であり、同時、キット間再現性、回収率、希釈試験はいずれも良好であり、LH, FSH, βHCG , HCG との交叉性は認められなかった。SUCROSEP TSH IRMA とは $0.1 \sim 50 \mu\text{U/ml}$, RIA-gnost TSH Ultrasensitive とは $0.08 \sim 50 \mu\text{U/ml}$ で良好な相関を得た。N の TSH は 1.56 ± 1.36 (S.D.), 正常範囲は $0.28 \sim 4.5 \mu\text{U/ml}$ であり、未治療 G は $0.1 \mu\text{U/ml}$ 以下で両者の鑑別が可能であった。妊娠各期における TSH の変動はなかった。以上より、本法は TSH 低濃度域における臨床応用に有用であると結論された。

10. 高感度 TSH 測定法：ELSA-TSH kit による血中 TSH 濃度測定法の基礎的ならびに臨床的検討

佐藤 龍次 原 秀雄 長倉 穂積
九島 健二 伴 良雄 (昭和大・三内)

チューブ管内の風車にポリクローナル抗体および標識抗体にモノクローナル抗体を用いた ELSA TSH IRMA (ミドリ十字社) の基礎的：臨床的検討を行ったので報告する。

対象：健常者 (N) 95 例、未治療バセドウ病 (G) 27 例、バセドウ病治療例 24 例、慢性甲状腺炎患者 7 例、正常妊婦 190 例を用いた。

結果：室温 3 時間のインキュベーションにて、TSH $0.2 \sim 100 \mu\text{U/ml}$ の測定が可能であり、再現性、回収率は良好。LH 500 mIU/ml , FSH 250 mIU/ml , HCG 150 mIU/ml , $\beta\text{-HCG}$ 50 ng/ml の濃度では交叉性は認められず、 $2 \sim 1,024$ 倍希釈まで可能で最低検出濃度は $0.1 \mu\text{U/ml}$ であり、改良法 (2 step) のそれは $0.05 \mu\text{U/ml}$ であった。N の TSH 平均値は $1.58 \pm 1.41 \mu\text{U/ml}$ で対数確率紙による正常値は $0.27 \sim 4.2 \mu\text{U/ml}$ で G では $0.2 \mu\text{U/ml}$ 以下に分布し、N との分離は良好。寛解 G (10) $3.0 \mu\text{U/ml}$ 以下、抗甲状腺剤投与中 G (10) $5.2 \mu\text{U/ml}$ 以下、他治療 G (4) $11.1 \mu\text{U/ml}$ 以下、妊娠月数による変化はみられなかった。本法は TSH 低濃度域における測定に有用と結論された。

11. ヒト心房性 Na 利尿ペプチド (hANP) の測定法の検討

小田 寿 塩之入 洋 高木 信嘉
金子 好宏 (横浜市大・二内)

ヒト心房性 Na 利尿ペプチド (hANP) は体液・電解質バランス、血圧調節に重要な役割を果たしていると考えられているが、その生理作用や分泌動態を明らかにするには血中濃度の測定が必要であり、われわれは RIA による測定を試みた。Peninsula 社製の抗 hANP 血清を使用し、酸・熱処理した血漿を RIA に用いた。 ^{125}I - αhANP は遅延添加し、B・F の分離は二抗体法で行った。対象は健常者 12 名、血液透析患者 10 名である。本 RIA 法による最小検出感度は 0.4 pg/tube で、標準曲線の中点は 32 pg/tube であった。健常者の血漿 hANP 濃度は